

教科書について

「楽しく学べて、コミュニケーション力が付く教科書」を求めて

考えてみませんか？

皆さんはこれまで、どんな教科書に出会い、
どんな「付き合い方」をしてきましたか。

長年、既存の教科書について疑問を持ちながら考え、
試行錯誤を重ねた現場の教師たちから「できる日本語」という
新しい教科書が生まれました。その壮大な作業の過程で
教師が学んだこと、考えたことを、皆さんと
共有していきたいと思います。

第7回

「プロフィシェンシー」で、 教師力アップ！ 2

文型導入のための場面探し？

- 1 あそこに山田さんがいます。
- 2 机の上に本とノートがあります。
- 3 兄さんはソウルにいます。
- 4 山下公園は横浜にあります。

ある教科書では、上の4つの文が、一度に提示されています。ここに、場面・状況の提示は全くありません。1と2は存在文、3と4は所在文で「います／あります」の両方の例文が出ています。

さて、これらの例文は、どんな場面・状況で導入し、練習し、応用練習に持っていけばいいのでしょうか。2だったら、教室の中で実際に机の上にあるものを使って学習することになるのでしょうか。

以前、こんな話(苦情?)を聞いたことがあります。「どうして『机の上は何がありますか』を何度も何度も質問するようなやり方をするんですか。目が見えるんだから、見ればわかるのに!」

これは、まず学習すべき文型があり、そこから場面を考えることから起こってくる問題です。実は、まず学習者が遭遇する場面があり、「その場面で求められる文型」を考えることが大切なのです。

友達の家に行く途中で道に迷った時、道行く人に「あのう、すみません。交番はどこですか(どこにありますか)」と聞

くことはよくあります。また、ある人は友達に電話をするかもしれませんね。そんな場面では、友達とどんなやり取りがあるのでしょうか。

ここで、「友達の家へ行く途中で道に迷って友達の家に電話している」場面を取り上げてみます。そして、「迷子になったとき、行きたい場所がどこにあるか質問したり、自分がどこにいるか言ったりすることができる」を行動目標として挙げ、「そこで実際にどんなやり取りが行われるのだろうか」と考えてみました。その結果、次のようなドリルが生まれました。

『できる日本語 初級』 7課「友達の家で」

- 例) A: もしもし、Bさん、^{ココ}どこにいますか。
B: ^{ココ}机の前(マシノマエ)にいます。
A: えっ? ^{ココ}近くに何が(ニ)ありますか。
B: ^{ココ}大きいスーパー(スーパー)があります。
A: わかりました。今、^{ココ}迎えに行きます。



このやり取りでは、自然な形で存在文と所在文がうまく埋め込まれています。

文型を導入するために場面・状況がある
 のではありません。まず場面・状況があ
 り、そこで「タスクを達成する」ために、
 必然性のある文型を学ぶのです。

そのためには、学習者の言語行動を注
 意深く観察し、分析し、整理していく力
 が求められます。それが「プロフィシェ
 ンシー」重視の教育実践の基本であり、
 そのことが教師力のアップにつながって
 いくのです。

その場面でどんな文型が 使われているのか

昨年『ロールプレイ玉手箱』(ひつじ書
 房)という本を出しました。これは、学
 習者が出会う場面に強く関心を持った教
 師達の話し合いから生まれました。教科
 書に書かれている日本語に満足するの
 ではなく、「実際の場面でどんなコミュニケ
 ーションが行われているのだろう」と、
 実践研究を始めたのです。そして、「そう
 だ！学習者自身に語ってもらおう。中級
 以上の学習者に、自分の体験からロール
 プレイを2つずつ作ってきてもらおう。
 大切なのは、『こんなとき、どう言うか』
 だ」という結論になりました。

出てきたロールプレイは350件、さま
 ざまな場面、やり取りがありました。学
 習者からのロールプレイを整理していく
 中で、場面や状況、人間関係などによる
 表現の変化も、明確になっていきました。
 これこそ、「日本語を使って、何が、ど
 のようにできるか」というプロフィシェ
 ンシー重視の日本語教育の基本です。

「私はもちろん、ちゃんと場面を考え
 て教えています」とおっしゃる方も、ち
 ょっと立ち止まって振り返ってみたい
 だけませんか。「この文型はいつ使うか」
 ではなく、「こんな場面ではどんな文型が
 使われるのだろうか」という発想で、教
 育実践をやっているのでしょうか。

地 域日本語教室のAさんは、落ちて
 いるペンを拾って、「誰のですか」
 と授業を始めました。口の練習をした後、
 「はてな箱」で活動を始めました。机の上
 にある学習者の持ち物を集めて「はてな
 箱」に入れ、取り出しては「誰のですか」。
 学習者の発話も多く、楽しい授業でした。

しかし、Aさんは、「これは意味のある
 活動だったのか。ただの口の練習ならい
 いけど、必然性がないし」と、振り返り
 はじめました。確かに、場面設定もなく、
 何のための「言語活動」なのかわかりま
 せん。さて、お弁当を買いに出ようとし
 たら外は大雨。教室にある傘を見てAさ
 さんは、「これ、誰の？」と言いかけて、「あ
 っ、今、使った！」と叫びました。

「文型のための場面探し」だけではな
 く、実生活でどんなやり取りをしている
 かを注意深く見ることの大切さを、あら
 ためて痛感したAさんでした。



嶋田和子

イーストウエスト日本語学校副校長。
 外資系銀行勤務の後、専業主婦を経て日本語教師。
 現在は、日本語教育業界を牽引する
 ベテランの一人として、学習者への
 日本語教育はもちろん、教師養成にも当たる。
 著書に『目指せ、日本語教師力アップ！
 —— OPIでいきいき授業』(ひつじ書房)、
 『キムチと味噌汁—韓日、異文化交流のススメ』
 (教育評論社)、『ワイワイガヤガヤ 教師の目、
 留学生の声 —— 異文化交流の現場から』
 (教育評論社)など、多数。
 『できる日本語』(アルク)監修

- 連載ラインナップ
- 第1回 教科書を考えるって面白い!
 - 第2回 どんな教科書と付き合ってますか?
 - 第3回 タスク先行型授業にチャレンジ!
 - 第4回 「わかる」から「できる」へ
 - 第5回 漢字学習も「できること」重視!
 - 第6回 「プロフィシェンシー」で、教師力アップ! 1
 - 第8回 21世紀の日本語教育は“対話”重視 1
 - 第9回 21世紀の日本語教育は“対話”重視 2
 - 第10回 自律的な学びを支えるモノ
 - 第11回 「学習者が話したくなる」教科書とは?
 - 第12回 対話で新たな日本語教師人生を!